

歴史ある学び舎が今春から休校



広島小で たった一人の卒業式

塩飽諸島最大の島で、青木石（花こう岩）と呼ばれる良質の石材産地として知られる広島市の「市立広島小学校」で3月17日、卒業式が開かれました。卒業生は濱純一君ただ一人。見送る在校生もおらず、4月からの新入生もいないため、島唯一の学び舎はこの春から休校となります。



地域の人たちが 門出を祝う

卒業式には先生、両親、OBや島の人たち計46人が出席し、濱君の門出を祝いました。濱君は明治10年の開校から2119人目の卒業生。川原留美子校長から卒業証書が授与された後、体調不良で一時退席した濱君に代わり、担任の小野奈保子先生が「先生や島の人たちに支えられて大きく成長できました。いつまでもみなさんのことは忘れません」という濱君の感謝の言葉を代読しました。式の後、出席者らも参加してバイキング給食が開かれ、島の最後の給食を楽しんだ濱君はお礼に、落語「ももたろう」を披露。この落語は、昨年11月に開かれた地元ふれあい祭りで「何かできないか」と考え、落語の経験がある先生に教わりました。



落語を一席披露する濱君

広島小は昭和20年から30年代半ばにかけては、200人を超える生徒が在籍していましたが、その後は年々減少し、平成18年から濱君一人になっていました。ピーク時に3000人を超えていた人口も3月1日現在、284人（161世帯）に激減。石材業や漁業が盛んですが、島に住んで仕事と生活をともにする暮らしから、今は丸亀港からフェリーで通い仕事に従事する人が多くなり、過疎化が進んでいます。「濱君は、学校行事を一人で行なうのは大変だったけれど、ミニ議会で市長に発言するなど良い経験ができた」と担任の小野先生は言います。

休校について、川原校長は「学校は地域の光で、その一つの明かりが消えるのは寂しい限り」と話し、濱君には「これまでコツコツと努力してきたので、これからもウサギとカメのカメさんのように頂上（夢）を目指し、一步一步、しっかりと歩んでほしい」とエールを送りました。

「小手島小中学校の友達と一緒に王頭山に登ったのがいちばんの思い出」と話してくれた濱君は、家族と一緒に島を離れ、

今月から南中学校に進学します。8年間、島で培った経験を生かし、新しい生活をスタートさせます。将来は、消防士になるのが夢だそうです。

卒業記念のDVDを制作

島を離れる濱君は、「島の私たちの優しさや島の美しさを知ってほしい」と、卒業制作で先生らと島の風景や史跡などを映像にとどめ、1枚のDVDに収めました。

昨年9月から濱君がインタビューとなり、先生がビデオを撮るなど撮影は年末まで続き、編集作業を経て3月12日に完成し

ました。タイトルは「ぼくの大好きな広島」。「思い出」「風景」「歴史」の3部構成で、お大師参りやいろは石ウオーク、王頭山から見える景色、学校近くに残るレキの墓などが収録されています。濱君は「島の人たちが協力してくれたおかげです。取材は良い経験、良い思い出になりました。これを見て島に来てほしい」と完成を喜びました。

濱君と学校の記念となるDVDは、人情味あふれる島の文化や自然豊かな広島を描いた作品に仕上がっています。卒業式でも放映され、市内の小学校やへき地の学校に配布する予定です。eとびあ・かがわのホームページ（<https://www.e-topia-kagawa.jp/>）からインターネットでも配信（4月1日公開予定）します。



レキの墓を取材する濱君

…ありがとう 思い出の学び舎を語る…



白賀誠治さん（上段、右から4人目）
広島町江の浦（昭和33年度卒）



「同級生が30人いて、運動会は保護者や地域の人らが加わりぎやかだった」と振り返る。当時は遊ぶものがなく、学校は学び舎であり、遊び場でもありました。学校が終わると家に帰り、また学校に戻って、日が暮れるまで走ったり、かくれんぼをしたりする日々。冬は体力をつけるため、放課後になると運動場で相撲を取っていたそうです。

「学校がなくなると、地域の元気もなくなる。寂しいという言葉だけでは言い尽くせない。学ぶ場所として恵まれた環境の島で暮らし、まことに仕事に通う。どんな形であれ少しでも早く学校を再開してほしい」と願っています。

《広島小学校の歩み》

- 明治10年1月 江の浦小学校として創立
- 昭和9年4月 現校地に校舎落成、移転
- 昭和22年4月 広島村立広島小学校と改称
- 昭和33年5月 広島村と丸亀市が合併し、丸亀市立広島小学校と改称
- 昭和62年4月 創立100周年記念式典
- 平成8年4月 広島西小学校を統合
- 平成17年3月 広島学校給食センターが廃止
- 平成18年4月 広島小学校を使用し、広島小学校と広島中学校が併設
- 平成22年4月 休校

昭和40年に兵庫から広島に嫁ぎ、55年、両親から引き継いだ江の浦フェリー乗り場の切符売り場で、島を行き交う人々を迎え、また見送ってきました。

今は結婚し、独立した3人の娘さんは広島小の卒業生。児童は少なかったが、その分、先生も家族のように接してくれ、友達とも男女の隔たりなく仲良くでき、今も親交があるとか。

「島の人気者だった濱君。また友達を連れて遊びに来てほしい」と、島から子どもの声が聞こえなくなることに寂しさを募らせています。

ここを巣立って行った子どもたちとの再会が

楽しみで、「帰ってきたん」「元気でしょん」「また帰ってきていよ」と声を掛ける戸崎さん。元気な限り売り場に立ちたいという戸崎さんの優しい声が、島の玄関口を今日も温かく見守っています。



戸崎紀美子さん
広島町立石